



静岡県公立大学法人

静岡県立大学

2025年度 第12期

# ジャーナリズム公開講座

静岡県立大学ジャーナリズム公開講座は2025年度、全12回の講座を開講します。

講座の目標は「ジャーナリズムの向上による民主主義の成熟」です。

現在、日本ではジャーナリズムの位置付けが希薄で、とりわけ専門知識が問われる安全保障、危機管理、科学技術分野においては、十分な検証能力を備えていない印象さえあります。

そのような日本の現状を打開し、日本と静岡の安全と繁栄を確かなものになりたい。

それが、本公開講座のねらいです。



オンライン生配信(ZOOM)・一部会場開催

**参加無料**

どなたでも事前にお申込みいただけます。

※オンライン先着200名様、会場先着100名様

2025年4月～2026年3月

全12回 毎月1回 18時30分～20時30分 開催

目 程	テ ー マ	講 師
① 4月14日(月)	日本は「自己満足」で滅びる	小川和久 (静岡県立大学特任教授)
② 5月27日(火)	トランプ時代の中東紛争	黒井文太郎 (軍事ジャーナリスト)
③ 6月26日(木)	イスラエルとパレスチナを取材すること	曾我太一 (ジャーナリスト)
④ 7月31日(木)	「李在明時代の韓国」を読み解くリテラシー	浅羽祐樹 (同志社大学教授)
⑤ 8月21日(木)	「大国インド」の報道と実態	湊 一樹 (アジア経済研究所研究員)
⑥ 9月29日(月)	戦争を遠ざける情報分析力	小泉 悠 (東京大学准教授)
⑦ 10月23日(木)	右派雑誌元編集者が語る左右の分断と克服の可能性	梶原麻衣子 (編集者・ライター)
⑧ 11月20日(木)	オープンデータ時代のジャーナリズム	熊田安伸 (SlowNews プロデューサー)
⑨ 12月18日(木)	依存症をどう報道するか	岩永直子 (医療記者、Addiction Report 編集長)
⑩ 1月22日(木)	トランプ王国は続くのか	金成隆一 (朝日新聞記者)
⑪ 2月19日(木)	聴き取られなかった沖縄の声を聴く	謝花直美 (琉球大学准教授)
⑫ 3月12日(木)	ロシア報道の落とし穴	保坂三四郎 (国際防衛安全保障センター (エストニア) 研究員)

▶申込方法 グローバル地域センターのウェブサイトから各回の案内にしたがってウェビナー登録をしてください。登録完了後に接続方法をご案内します。

<https://www.global-center.jp>

▶お問い合わせ

静岡県立大学グローバル地域センター



Tel:054-245-5600 E-mail:nishi@u-shizuoka-ken.ac.jp(担当:西)

<p>第1回 4月14日(月)</p>  <p>小川和久 静岡県立大学 グローバル地域 センター特任教授</p>	<p>中国、ロシア、北朝鮮の 脅威どころじゃない 日本は「自己満足」で滅びる 警察、消防、自衛隊、 サイバー…は穴だらけ</p> <p>1945年熊本県生まれ。陸上自衛隊生徒教育隊・航空学校修了。同志社大学神学部中退。日本海新聞、週刊現代記者を経て84年、日本初の軍事アナリストとして独立。外交・安全保障・危機管理の分野で政府の政策立案に関わり、国家安全保障に関する官邸機能強化会議議員などを歴任。2012年から現職で静岡県の危機管理体制の見直しに取り組んでいる。『日本人が知らない台湾有事』、『メディアが報じない戦争のリアル』、『フテンマ戦記』など著書多数。</p>	<p>第2回 5月27日(火)</p>  <p>黒井文太郎 軍事ジャーナリスト</p>	<p>トランプ時代の中東紛争</p> <p>1963年福島県いわき市生まれ。福島県立磐城高校、横浜市大文理学部国際関係課程卒。講談社に入社、週刊誌編集者として勤務。退社後、フリージャーナリストとしてニューヨーク、モスクワ、カイロを拠点に国際紛争を取材。帰国後、月刊『軍事研究』記者、『ワールド・インテリジェンス』編集長などを経て軍事ジャーナリスト。『中東紛争』、『工作・謀略の国際政治』、『謀略の昭和裏面史』、『ブーチンの正体』、『イスラム国の正体』、『北朝鮮に備える軍事学』など著書多数。</p>
<p>第3回 6月26日(木)</p>  <p>曽我太一 ジャーナリスト</p>	<p>イスラエルとパレスチナを取材 するということ ～2つのナラ ティブの“間”を伝える～</p> <p>1986年新潟県生まれ。新潟大学人文学部卒、東京外国語大学大学院総合国際学研究科修了後、2012年NHK入局。札幌放送局などを経て、報道局国際部で移民・難民政策、欧州情勢などを担当し、20年からエルサレム支局長として和平問題やテック業界を取材。ウクライナでロシアによる侵攻を取材した。23年末NHK退職後、中東を拠点にフリーランスとしてイスラエル・パレスチナ問題などを取材し、新潮社フォーサイト、ニューズウィーク日本版等に記事を執筆している。</p>	<p>第4回 7月31日(木)</p>  <p>浅羽祐樹 同志社大学グローバル 地域文化学部教授</p>	<p>「李在明時代の韓国」を 読み解くリテラシー</p> <p>1976年生まれ。立命館大学国際関係学部卒、ソウル大学校社会科学大学政治学科博士課程修了、Ph.D. (政治学)。九州大学韓国研究センター講師、山口県立大学国際文化学部講師、同准教授、新潟県立大学政策研究センター准教授、同大学国際地域学部教授を経て2019年から現職。24年度は韓国政府のシンクタンク・統一研究院で在外研究。専門は韓国政治、比較政治学、司法政治論。主な著作に『比較のなかの韓国政治』、編著に『韓国とつながる』、『はじめて向きあう韓国』、『韓国語セカイを生きる 韓国語セカイで生きる』。</p>
<p>第5回 8月21日(木)</p>  <p>湊 一樹 アジア経済研究所地域 研究センター研究員</p>	<p>「大国インド」の報道と実態</p> <p>1979年青森県生まれ。東北大学経済学部卒。2006年ボストン大学より修士号(政治経済学)を取得後、日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所に入所。専門はインドを中心とする南アジアの政治経済。著書『モディ化するインドー大国幻想が生み出した権威主義』。共著『コロナ禍の途上国と世界の変容』、『これからのインド』、『素顔の現代インド』、『後退する民主主義、強化される権威主義』。訳書に、『アマルティア・セン/ジャン・ドレーズ著『開発なき成長の限界』。</p>	<p>第6回 9月29日(月)</p>  <p>小泉 悠 東京大学先端科学技術 研究センター准教授</p>	<p>戦争を遠ざける情報分析力</p> <p>1982年千葉県生まれ。早稲田大学社会科学部卒、同大学院政治学研究科修了。政治学修士。外務省分析員、ロシア科学アカデミー世界経済国際関係研究所客員研究員、未来工学研究所研究員などを経て2019年東京大学先端科学技術研究センター特任助教、22年同専任講師、23年から現職。25年7月から防衛省宇宙領域アドバイザーボード委員。専門はロシアの軍事・安全保障、特に軍改革、ハイブリッド戦略、核戦略、宇宙戦略。著書に『情報分析力』、『ウクライナ戦争』、『現代ロシアの軍事戦略』、『「帝国」ロシアの地政学』(サントリー学芸賞)など、共著に『2030年の戦争』、『サイバースペースの地政学』など。</p>

<p>第7回 10月23日(木)</p>  <p>梶原麻衣子 編集者・ライター</p>	<p>右派雑誌元編集者が語る 左右の分断と克服の可能性</p> <p>1980年埼玉県生まれ。中央大学文学部史学科東洋史学専攻卒。IT企業勤務後、2005年に月刊『WILL』編集部に入部。16年に月刊『Hanada』創刊とともに同誌編集部へ移り、19年からフリーのライター・編集者。政治系・安全保障系を中心にインタビュー記事などの取材・執筆のほか、書籍の企画・編集・構成（ブックライティング）などを手掛ける。著書に『“右翼”雑誌』の舞台裏』。</p>	<p>第8回 11月20日(木)</p>  <p>熊田安伸 SlowNews プロデューサー</p>	<p>オープンデータ時代の ジャーナリズム</p> <p>1967年岐阜県生まれ。早稲田大学卒。90年NHK入局。沖縄局、報道局社会部で「公金」をテーマに調査報道。新潟局、仙台局で震災報道を指揮。2006年、スクープの取材源をめぐって民事裁判で争い、最高裁が記者の取材源秘匿を認める初判断を示す。17年、ネットワーク報道部設立に尽力。「政治マガジン」「AIリポーターヨミ子」「NHK取材ノート」などを開発・運営。21年、ウェブメディア SlowNews に移籍。NPO 報道実務家フォーラム理事。NHK スペシャル「追跡復興予算 19 兆円」でギャラクシー大賞など。「調査報告 日本道路公団」で芸術祭優秀賞。著書に『記者のためのオープンデータ活用ハンドブック』。</p>
<p>第9回 12月18日(木)</p>  <p>岩永直子 医療記者、Addiction Report 編集長</p>	<p>依存症をどう報道するか</p> <p>1973年生まれ。東京大学文学部卒。98年読売新聞社入社。社会部、医療部、医療サイト「ヨモドクター」編集長を経て、2017年 BuzzFeed Japan 入社。BuzzFeed Japan Medical を創設し、医療記事を執筆・編集。23年からフリー。健康格差、HPV ワクチン、優生思想、コロナ禍などについて報道している。24年に依存症専門オンラインメディア Addiction Report 創刊、編集長。著書に『言葉はいのちを救えるか?』、『今日もレストランの灯りに』、共著に『アディクション・スタディーズ 薬物依存症を捉えなおす 13 章』、『新養生訓健康本のテイスティング』、『この国の不寛容の果てに 相模原事件と私たちの時代』。</p>	<p>第10回 1月22日(木)</p>  <p>金成隆一 朝日新聞 Globe 編集部記者</p>	<p>トランプ王国は続くのか</p> <p>茨城県出身。2000年朝日新聞入社、大阪社会部を経て米国留学。1950年代の米政府の対日「原子力平和利用」政策を調査報道。教育担当として海外のオンライン教育の発展を取材し、第21回坂田記念ジャーナリズム賞。2014-19年ニューヨーク支局員として国連や米社会を担当。変容する国連平和維持活動（PKO）をコンゴ民主共和国から報道。15年から草の根のトランプ旋風を取材し、一連の米国報道で18年度ボーン上田記念賞、『ルポ トランプ王国』『ルポ トランプ王国 2』で第36回大平正芳記念賞特別賞。その後東京経済部、機動特派員（20年米大統領選）を経て21-23年は欧州総局員としてウクライナや英イングランド北部の社会を取材。大阪社会部を経て25年から現職。</p>
<p>第11回 2月19日(木)</p>  <p>謝花直美 琉球大学人文社会学部 人間社会学科准教授</p>	<p>聴き取られなかった 沖縄の声を聴く</p> <p>1962年沖縄県生まれ。90年から沖縄タイムス記者として沖縄戦と沖縄戦後史の報道に携わる。2018年、大阪大学文学研究科博士課程修了、博士（文学）。22年沖縄タイムス社を退職、同志社大学＜奄美ー沖縄ー琉球＞研究センター嘱託研究員、沖縄国際大学非常勤講師を経て、24年10月から現職。著書に『沈黙の記憶 1948年』、『戦後沖縄と復興の「異音」』、『証言沖縄「集団自決」』、『戦場の童』、共著に『いま沖縄をどう語るか』、『観光コースでない沖縄 第5版』など。</p>	<p>第12回 3月12日(木)</p>  <p>保坂三四郎 国際防衛安全保障 センター (エストニア) 研究員</p>	<p>ロシア報道の落とし穴</p> <p>1979年秋田県生まれ。2002年在タジキスタン日本国大使館、04年旧ソ連非核化協力技術事務局、18年在ウクライナ日本国大使館などの勤務を経て、21年より現職、タルトゥ大学ヨハン・シュッテ政治研究所在籍。25年、タルトゥ大学で博士（政治学）取得。専門はソ連・ロシアのインテリジェンス活動、戦略ナラティブ、歴史的記憶、バルト地域安全保障。17年、ロシア・東欧学会研究奨励賞。22年、ウクライナ研究会研究奨励賞受賞。主な著書に『諜報国家ロシア ソ連 KGB からプーチンの FSB 体制まで』（山本七平賞受賞、中公新書）。</p>